健康ビッグデータ活用で「健康長寿社会」実現へ！

COI STREAM

認知症・生活習慣病の予兆発見、予防法開発に向けた弘前大学健やか力創造拠点（COI）のチャレンジ

青森県は残念ながら、日本一の短命県である。「弘前大学健やか力創造拠点（COI）」では、短命県脱却を一大目標に掲げ、産学官の交流を結束する政府のプロジェクトを推し進め、いま日本中から大きな注目を集めている。全国有数の大学や企業、研究機関からの参画や視察が相次ぐそのわけは…。本拠点の取り組みやねらいについて、ご紹介する。

世界に類を見ない健康調査「岩木健康増進プロジェクト」がすべての始まり

国民の4人に1人が高齢者（※1）という、超高齢社会へ世界に先駆けて突入した日本は、高齢者の占める割合が2025年には約30％、2060年には約40％に達すると予測（※2）され、医療費の増大や介護の人手不足への対策が急務である。

中でも青森県の高齢化率は30％（2014年）と高く、2040年には40％に達する（※1）。

平均寿命で見ると、青森県は男女ともに全国最下位（※3）であり、青森県が日本一の短命県から脱出を図るには、県下の産官学民が互いに連携し、健康づくりを自分ゴトとして活動を行う必要がある。

弘前大学では、青森県が平均寿命全国最下位にあることから、短命県という汚名を返上すべく、医学研究科社会医学講座の中路重之教授が中心となって「岩木健康増進プロジェクト」と題して、自治体などと連携して、弘前市岩木地区の住民に対する健康啓発活動を長年続けている。プロジェクトの一環として、2005年から毎年健康調査を実施しており、本年度で12年目となった。

健診には毎年約1,000名の住民が参加者し、同地区の小中学生約500名対象の調査も含めると、健診で得られる住民の健康情報（＝健康ビッグデータ）は、述べ約2万人と非常に膨大である。

健診項目は約600あり、体格や体組成に限らず、手間や費用のかかる遺伝子解析、腸内細菌を調べるほか、就寝時間や食事内容、労働環境や学歴などにも及ぶ。この〝健康ビッグデータ〟を用いることによって、分野の垣根を越えた網羅的な解析が可能となる。住民一人当たりの健診時間は約5時間以上と住民負担は大きいが、本学と住民との厚い信頼関係によって、〝健康ビッグデータ〟は毎年蓄積されている。

世界的にも珍しいこの健康調査と健康ビッグデータがきっかけとなって、政府の国家プロジェクトである弘前大学健やか力創造拠点（COI）は誕生する。

弘前大学COI研究推進機構
教授（戦略統括）
村下　公一

※1.平成27年版高齢社会白書(内閣府)より
※2.平成24年度高齢社会白書(内閣府)より
※3.厚生労働省が5年ごとに発表する平均寿命都道府県ランキングより。
青森県の男性は1985年調査から、女性は2000年調査から平均寿命が全国最下位。

岩木健康増進プロジェクト：大規模住民合同健診

※医師を中心とした**総勢200～300名程度**が連続10日間(AM6:00-PM3:00)実施：岩木地区
※健(検)診受診者：20～**93歳**。1人あたり健診所要時間は**5-7時間**（小・中学生も別途実施）

＜平成28年度実施概要＞

被検者		検者			
参加者数		医師	健幸リーダー	大学スタッフ，学生	COI参画企業
5月28日	100	40	32	80	46
5月29日	120	40	29	80	46
5月30日	115	40	32	82	46
5月31日	115	40	34	83	46
6月1日	114	40	34	85	46
6月2日	119	40	31	113	46
6月3日	108	40	29	98	46
6月4日	110	40	33	78	46
6月5日	129	40	32	79	46
6月6日	118	40	28	92	46
合計	1,148	400	314	870	460

※12年間実施し延べ約2万人以上。H28は別途65歳以上高齢者対象認知症健診1.3千人実施。